

語り継ぐ、明日へ。



歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう

釣っていたのが、
遊んでいたのが。

いまでは小学生でもリールにルアーロッドを携えてのスマートな釣り。ものない時代は、少ない小遣いで調達した延べ竿のウキ釣りがほとんどでした。この季節、北海道では主にコサバやチカですが、高度成長のころの港内は、場所によっては水面にゆらりとうねる油の層。家では歓迎されざる獲物です。ただ釣るのが面白くて、時に漁船や貨物船の出入りを眺めながら日がな一日、遊んでいたもの。港がきれいになった現代、日参する釣り人の多くはお年寄りです。そしてそれを見回りに来るのもお年寄り。小物釣りに熱中する少年たちの姿は少なくなったようです。

ひと街ごと No. 33

- ・時の街角／旧大石三省堂支店——2
- ・マチの博物館／遊び工房「海運堂」——3
- ・川筋を行く／余市川——4
- ・来た道行く道／東京江戸風匠——5
- ・あるはむれトロポリス／二条市場——6
- ・道具で道草30年——7
- ・時計のある風景——8

二〇一〇年秋(年四回発行)

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL(011)561-1597

編集：ひと街ごと刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目 北海道不動産協会四階
(編)編集工房海内 TEL(011)633-1651



時の街角

北海道開拓の村から

和洋菓子がスイーツなどと呼ばれ新しいものが出てはすぐに消えていきますその昔、甘いものが貴重だった時代には職人が一つ一つ心をこめて作ったものその自家の和菓子を三十年間販売していた店です

和菓子製造に誇り、工場や職人部屋も。

旧大石三省堂支店

明治四十年建築

和菓子に欠かせない小豆の産地として、十勝地方が全国に知られています。これは明治から大正にかけて本州で盛んになった菓子づくり用に、良質の小豆を供給したことが始まり

父、大石菊松は、明治から大正期にかけて札幌で菓子店「うすまき大石三省堂」を営業。長らく札幌菓子商組合の副組長や役員を務めて功績のあった人

のようです。その一方で現在、同地方に拠点を置く有名メーカーの創業は昭和に入ってから。戦後すぐというところもあります。ですからそれまでは、小規模の菓子店が自家で作ったり、仕入れたたりして素朴に営業を続けていただろうことは想像に難くありません。



落雁を作る木型。出来上がりは右上のように

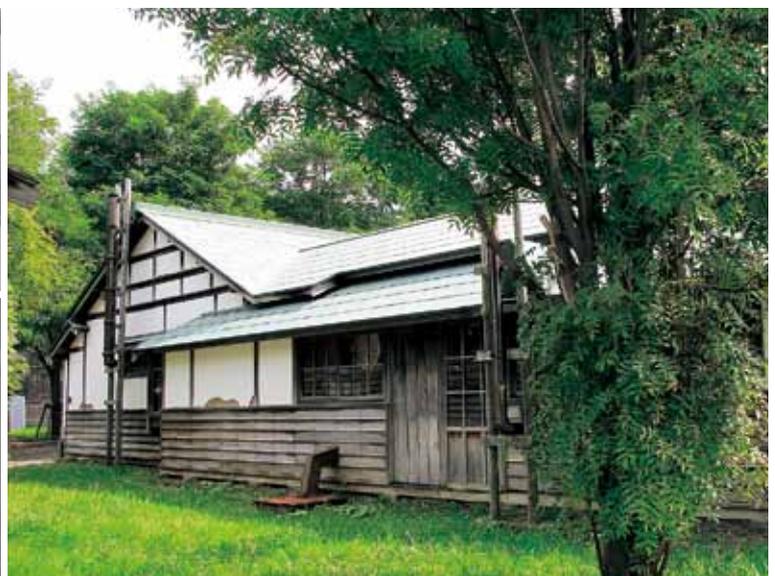
です。泰三はその父の元で修業し、大正十四年(一九二五)、帯広の繁華街にあったこの店舗を購入。大石三省堂支店を開業しました。

建物は明治四十年に建てられた、やはり菓子店として使われていたものです。間口のさほど広くない店舗ですが、住居部、工場へと連なる奥行きがあり、特に工場の広さに驚かされます。外観は「帯広地方の建物」の特色である腰鉤下見板張り

り、壁真漆喰塗仕上げ(道開拓の村記念誌)。外壁下部には下見板を張り、上部を漆喰で仕上げるのが、同地方のはやりだったのでしょうか。居室は炬を切った居間と寝室が六畳、表座敷と職人部屋が四畳半となっています。

ここでは、夫婦と二人の職人で落雁や羊かん、ねりきり、まんじゅう、せんべい、あめなどを作り、問屋から仕入れたパン類やキャラメル、チョコレート、ビスケット、駄菓子類と一緒に売っていました。

店先に並んだショーケースや菓子びん、缶類などが、古きよき時代の菓子店を思い出させてくれます。単なる駄菓子屋とは異なった印象なの



は、自ら製造している和菓子類への矜持の表れかもしれません。

同店は昭和三十年まで、親子二代にわたって営業を続けていました。

下見板張りに漆喰仕上げ
これが当時の「帯広流」
居間には炬を切っており
洗い場も広い

※さまざまな和洋菓子を入れるショーケースが並ぶこぢんまりした店先
奥には職人たちが立ち働く工場があり、道具類もたくさん

※参考文献 北海道開拓の村・開村10周年記念誌

オレンジ色のあたたかな光をともしながら
 物思いにふける秋の夜のひととき
 燃やすのが惜しいならインテリアに加えても——
 若い女性に人気の蜜ろうキャンドルを紹介しま

オレンジ色の光は、 ミツバチからの贈り物。

中由紀子さん。十二年ほど前に偶然カナ
 ダフェアで出会った蜜ろうに魅せられ、
 資料や写真を頼りに独学でこの道へ。

小中さんが作品に使用するのは色数が
 豊富な薄い板状の蜜ろう。はちみつを
 取った後の蜜ろう（はちの巣）を着溶か
 して不純物を除き、有機染料で着色して
 ローラーをかけたものです。これを作品
 に合わせてカットイング。ドライヤーで



色とりどりの蜜ろうシート
 細工はカットイングしてドライヤーで



蜜ろうの原型はこのはちの巣
 煮溶かして染色後、シートに

熱しながら細部
 を仕上げていき
 ます。
 棚に並ぶ数百
 点のキャンドル
 は「二、三分で
 できるものもあ
 れば、二目ぐら
 いかかるもの



海運堂のあるじ、小中由紀子さん
 工房内での講習や出張講師も



油煙やにおいがなく、オレンジ色の光がやさしい蜜ろうキャンドル。工房を兼ねた店舗は六軒ほどのスペース



燃やすのが惜しければ、インテリアにどうぞ

も「小中さん」。形も色もさまざまです。
 基本はストレータイプとテーパータイ
 プの二つですが、花や果実の形を
 したするなど小中さんのオリジナルもた
 くさん。燃やしてしまうのが惜しい人
 はインテリアのアイテムとしてお勧めで
 す。値段も二、三百円から千円ちょっと
 と手ごろです。
 火をつければ小さなもので十分から



看板はウエットスーツの素材で
 店名も「海運堂」その秘密は？

二十分、長
 いもので二、
 三時間は燃
 えています。

蜜ろうの特
 徴は「あたたかなオレンジ色の光と、油
 煙やにおいがほとんど出ないこと」（小中
 さん）。食事の時に使っても味を邪魔し
 ませんし、のどの弱い子供にも安心です。
 もちろんクリスマスやホームパーティー
 の演出に最適。お菓子のようにも見えま
 すから、目先が変わった土産としても
 喜ばれているとか。

工房でキャンドル作りの講習を受けら
 れ、人数がそろえば出張講師を引き受け
 てもらえます。古い二階建ての民家が目
 印の工房をのぞいてみてください。



一見ろうそくとは思えない作品もたくさん
 パラの花は水に浮かべるフローティングタイプ

余市川

川筋を行く

人と川の
様々な
かわりを
たずねて

人の心も豊かに

フルーツのかおり漂う町、 歴史は川の恵みとともに。

町の真ん中を流れる川を朝な夕なに眺める暮らし。そして海もあり、山もある環境。いかにも人の心まで豊かになりそう——河口から仁木町との境に近い鮎見橋まで。余市川の堤を歩きながら感じられたことです。

国道五号線の大川十

字街を横丹方面に真っ直ぐに進むと、すぐに差し掛かるのが余市川の大川橋です。右手には河口とフィッシュリーナ（漁港）。高くそびえるモイレ岬の下に回れば国の重要文化財、旧下余市運上屋があります。

モイレとはアイヌ語で「静か」という意味。ここが天然の良港であることは、かつてニシン漁で栄え



リンゴやブドウなど隣の仁木町とともに道内最大の果樹栽培の地



河口にシャープな線が美しい大川橋

たこと
で分かります。昭和三十三年（一九五八）に古平・美国へ通じる二二九号線が完成するまでは、両地区への船便

が就航しており、河口に棧橋もあつたのです。次は大川橋の上流にあるのが余市橋。JR余市駅前を起点とする二二九号線が

真っ直ぐここへ通じます。同駅前

にはニッカウイスキー余市工場、隣に宇宙記念館です。

そのニッカ工場。創業者の竹鶴政孝が、ウイスキー造りを学んだスコットランドとよく似ていることから、新会社設立の地に選んだもの。良質の水は大きな条件の一つでした。ここを訪れるほとんどの人は駅前の正門からの

出入りで、工場が余市川のすぐ傍にあると

国の重要文化財 旧下余市運上屋 江戸時代の栄光だ



下余市運上屋の前はプレジャボート兼用のフィッシュリーナ



つてみると、緑の中によつきりと顔を出した赤い屋根がすぐにそれとわかります。この河口付近には図書館、体育館、野球場、陸上競技場など、町

の公共施設もたくさん揃っています。そして春のサクラ。ゆったりとした川の流れに沿って咲く眺めが見事です。余市橋の次は田川橋。さらにさ



川べりから望むニッカウイスキー工場の赤い屋根

かのぼっていくと鮎見橋。その名のとおり鮎の築場があります。鮎

はここが北限とされており、観光名物にする

自慢のサクラつつみ がつつみという表示が本州的だ



川のそばにある町立図書館 赤い屋根はニッカ風



までには、人工孵化や琵琶湖産の稚魚を放流

するなど大変な苦労があつたようです。今では鮎料理を食べさせて



鮎見橋の近くには鮎の築場（やなば） 鮎料理を看板に掲げる店もある

くれる店の看板も定着しています。こうして川筋を歩くだけで余市川のさまざまな恵みを目にする事ができますが、どこにいてもなんとなく感じるフルーツのかおり。仁木町とともに道内最大の果樹栽培の地を形成しているということ。これこそが余市川の最大の恵みかもしれません。

田川橋から河口方向を望む。悠々たる流れ



来た道、行く道。

様々な先達がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ——
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦、他薦を
お待ちしております。

凧(たこ)といえ、一般的には空高く舞う揚げ凧です。飾り凧というのを見たことはありませんか。縁起物として額装を施された小さな凧——新しい年を控えて、卯年にちなんだ飾り凧の想を練っている小山仁子(にこ)さんです。

凧のことなどまったく興味のなかった小山さんが凧職人の道を歩み始めるきっかけは、札幌で会社勤めをしていたころ、飲食店で偶然隣り合わせた東京の凧職人から、興味があるならと自宅に凧が送られてきたこと。その後、母親と内職程度に作り始めましたが本格的に目指したくなり、江戸凧職人、三代目小塚菊太郎の門を叩いたのが昭和五十八年(一九八三)でした。

江戸凧とは江戸時代から東京に伝わる長方形の揚げ凧の総称。武者や歌舞伎役

者などの絵で知られています。小山さんが入門したのは、「菊匠」と呼ばれる宗家が武士という菊川派の正統。そこで七年



ミニとはいえ仕上げが研心
最後の工程は糸目を付けること

間の修業を終えて「江戸凧匠」として独立。札幌に戻ってきてから平成五年(一九九三)、新しく「東京 江戸凧匠」の看板を掲げてオリジナルの凧作りに取り組んできました。



自宅の2階が仕事場。朝から一日中座っていることも多い

小山さんのここまでの大きな足跡となる作品の一つは、全国各地にある凧をミニサイズに仕上げた飾り凧。郷土凧が次第に作られなくなっていく時代に、「原型のままに残していくのは大変だ」と思っ



東京 江戸凧匠
札幌市手稲区星置2条6丁目3-24
TEL (011) 694-0037



江戸歌舞伎風もお得意の分野の一つ
組み合わせる独楽も一流職人が作ったもの

調べれば調べるほど凧の世界が面白くなり、郷土凧は最終的には九十近い数になったそうです。そしてもう一つの代表作は、江戸の火消し組のまとい四十八本を凧に描き、横幅二メートル以上もある額に収め

江戸職人へ入門、独自の飾り凧が縁起物に人気

小山仁子(にこ)さん——札幌市・東京 江戸凧匠



たもの。「十セット作ったのですが、すぐに売れてしまった」ユニークな作品です。飾り凧作りは和紙に凧絵を描き、それを竹に張って、糸目を付けていくという三つの段階があります。凧の生命ともいわれる小山さんの手描きの絵は、温かみのあるお地蔵さんの絵で知られる殿村進師(故人)に学んだもの。同氏からは十二支の絵文字も伝授され、今日の凧絵の大きな礎となっています。

さらに凧作りには重要なのが竹。小山さんが使うのは、水分を多く含んだ春に伐



江戸の火消し組のそれぞれのまといを凧絵にしたユニークな飾り凧48本を横幅2m以上の額に収めた記念碑的作品でもある



揚げ凧や夫婦凧、家紋凧など手描き、手作り江戸凧を表現する

も大事に使っているそうです。このほか凧に組み合わせる小さな独楽や扇子も、一つ一つが職人の手による特注品です。「私一人の手でなく、たくさんの方の応援をいただいている一つの作品が出来ている」という小山さん。江戸の伝統に現代感覚を取り入れた夫婦凧や家紋凧、手形足形凧、干支凧などが、人生の節目の縁起物として喜ばれています。



東京・上野のアメ横並みの賑わい
こんな時代もあった(昭和五十九年十二月)

昭和58年(1983)9月の二条市場
路上での荷物の積み上げ、駐車が目立つ



あるばお レトロポリス

二条市場

初めて訪ねた街を知るにはそこで一番高いところに行くと
そしてもう一つは大きな市場を歩いてみることに
二条市場は都心にあっても札幌を教えてくれる場所です
スーパー、コンビニ全盛の世に、対面販売を守っています

明治初めから守る対面販売 周辺再開発で賑わい復活も。

どこの都市にも「市民の台所」と呼ばれる市場があるもので、二条市場もその称号が冠せられて久しいでしょう。しかしここに限らず地域の対面販売の店は、スーパーや大型店に客を奪われて苦戦を強いられているのが現状です。天気の良い秋の日の夕方、ぶらりと覗いたそこに市民の姿は少なく、観光客がちらほら見える程度でした。

にも似た存在。その歴史を振り返ることも無駄ではないでしょう。発祥は明治初期といえますから相当地に古い話です。石狩浜の漁師が鮮魚を売りに創成川をさかのぼってきとされていきます。当時は十数店ほどだったのが次第に数が増え、現在のような市場が形成されたのは明治三十年代後半のこと。火災による焼失から新たに店舗が建設されたことで、魚屋以外の店もできてさらに賑わうようになりました。

ニシンの時季などは、千歳や島松あたりから木炭を売りに来た人たちが一晩泊まって大量に魚を仕入れて帰り、地元で売りさばいたそうです。それから、旅館や居酒屋、そば屋などの繁盛ぶりも想像できます。

そして戦後は闇市の賑わいを経て、観光名所としても定着。市場内にある新二条市場とともに息長く対面販売を守り続けています。現在のアーケードが設置されたのは平成五年(一九九三)のこと。さらに同十九年(二〇〇七)にはのれん横丁なる飲食街もできました。

市街地再開発や創成川東地区の再生で、一帯への関心が高まりつつある現在、二条市場が次なる賑わいを取り戻すチャンスは、創成川通りアーケードパス化に伴う親水緑地空間の完成や、北海道四季劇場のオープンかもしれません(ともに来年)。



これが対面販売。トレイにラップで密封されたものはない(札幌市観光課提供)

押し寄せる再開発の波
高くそびえるマンションとガンコな二条!!



正月用の新巻を求める夫婦
心を込めて勧める店員
(昭和54年12月)
※上4枚は札幌市文化資料室提供



雪が解けてぬかるんだ道もものかは
やはり市民の台所(昭和32年2月)

道具で

道草30年

どんな中原悌二郎の評伝にも出てこない、武勇伝、その一部始終の目撃者ならぬ同行者が宮田画伯だった若き芸術家たちの東京日記の一ページ――

坂一敬

レトロスペース坂会館・館長（坂栄養食品開発部長）

さて宮田清画伯は、体調を崩したため中学卒業が遅れ、美術学校の入試はすでに終わっていた。そこでどこかの研究所に入るべく上京した。

下宿からすぐのところ、絵の研究所があるというので覗きに行ったら、「おおつ、宮田」と声がかかった。中原悌二郎だ。歩いて五分ほどなので、とりあえず入学することにした。ここが中村不折の太平洋画会研究所で、午前は満谷国四郎、午後は石川寅次、別に新海竹太郎の彫刻があり、月謝は一円五十銭。彼の絵描き人生のスタートだった。

偶然とはいえ下宿が研究所のそばなので、仲間がよく来るようになった。なかでも中原は中学以来。四時に研究所が終わると宮田さんのところ、ということ、夕飯は二人で食べるようになった。

当時、東京で暮らしていくには月十五円は必要だったが、中原には仕送りがありなく苦勞していた。彼は、ボール紙に二カワを引いて、その上に風景や静物を描くペンキ画で

不足分を補っていた。ある日、宮田さんは中原に提案した。「お前が描いているペンキ画、

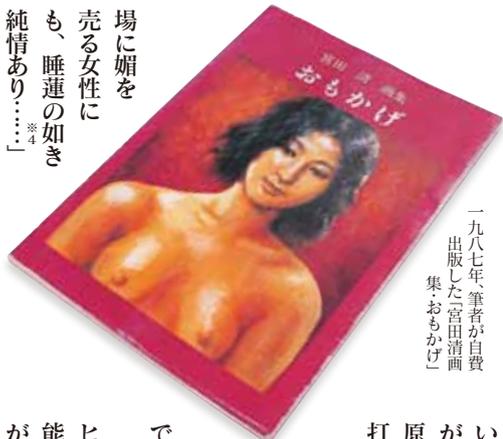
中原悌二郎との、ペンキ画生活の果て。

二人で分担してやれば枚数が稼げる。俺も手伝う。中原の指導のもと、二人で数を増やしていった。元締めのおヤジさんからも「あんた方はペンキ画の大家になる素質が十分にある」と期待されるまでになった。

そんな訳で中原の生活もかなり改善されたはずなのだが、夕飯は相変わらず宮田さんのところ。全然ラクになつたように見えない。そこで中原にたかすと、彼が宮田さんを引張って行ったのが浅草だった。

「富貴名門の子女に恋するを純情の恋と誰が言う。路頭にさまよい春

を売る婦女に恋するを不浄の恋と誰が言う。雨降らば雨降る宵、風吹けば風吹く宵、泣いて笑って月下の酒



場、に媚を売る女性にも、睡蓮の如き純情あり……」

中原を責める前に宮田さんもは

まっぴらだったのである。二人でせつせとペンキ画を描いては浅草通いだ。でもこんなことは当然にも永くは続かない。あるとき、相手の女性の誘いに乗ったがために、豪傑気取りの中原とともに最悪の事態に陥ってしまったのだ。

途方に暮れて研究所どころではなく、宮田さんは慶応に行っていた。中村の同窓の中村に相談してみた。中村いわく、「お前はツイている。秦博士がいま開発中の606号、これが病原を根絶できるという話だ。三本も打てば大丈夫」。念のためといって二人で八本分のお金を貸してくれ、

「お前には彼女の写真の件で世話になつているから、返済のことは気にするな」と言ってくれた。その新薬の力はすごいもので、二人とも完全に治つたのである。秦博士は千個あまりの薬を試し、ヒ素が主成分の606番目の薬に効能のあることを見つけた。これが後のサルバルサンだ。二人とも博士に足を向けては寝られない。再び絵描き人生に戻ることができたのだ

から。その時、宮田さんは思ったぞうだ。かの女性のしたことは、きつと世を恨み男を恨んでのことだったのかも。そしてもう二度と赤い灯の世界には足を向けまいと。中原も反省はしていたが、それは対象を素人へと替えるものだった。後には中村への借金が残った。何とかしなければ――。（この項続く）

※1 1888-1921 彫刻家 釧路生まれ 近代日本彫刻を代表する作家 旭川市に中原悌二郎賞
 ※2 札幌中学（現札幌南高校）
 ※3 いずれも明治から大正、昭和にかけて活躍した洋画家、彫刻家
 ※4 「蒙古放浪歌」（仲田三孝作詞、川上義彦作曲）の序から 大学寮歌などに変型がある
 ※5 秦佐八郎 医学博士 島根県益田市に世界的偉業を称える記念館がある

れんがの街の あたたかみ。

何かに追い立てられるように過ぎていく毎日。いつもそこにある時計に、足を止めることを忘れていませんか。



江別の市街地を歩くと、いたるところでれんがの造形に出合います。れんが製造の始まりは明治二十年代にさかのぼるといえますから、街の歴史とともにそのあたたかさが育まれてきたといえるでしょう。住宅や倉庫、店舗、学校、バス停——同市元町



の交差点にあるこのサイン塔は、時計のほかに銅製の案内表示や風向計、レリーフなどが組み合わされています。ベンチに日向ぼっこしているのは、これも銅製のネコ。こんなれんがの作品があちらこちらにある街の住み心地は、言わずもがなでしょう。

Now Printing

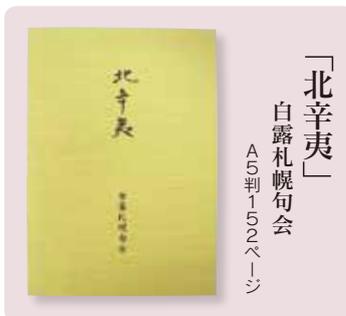
●本づくりのパートナー
(社)印刷紙工

居間で本づくりセミナーを
自分史など本をつくりたいと考えている人のために、出前の本づくりセミナーを承ります。三人以上のお集まりで会場をご用意いただけます。日時をご相談の上、印刷担当者や編集者がお伺いいたします。ご自宅の居間でも結構です。もちろん無料です。

記念誌は未来への道しるべ
企業や団体の十年を一区切りとする創立周年、二十周年、三十周年と歴史を重ねていく度にその歩



つくってみませんか
句集・歌集・詩集・小説・随筆集・自由体・歌謡記・回想集・画集・写真集



「北辛夷」

白露札幌句会

A5判152ページ

水天の真闇に生るる烏賊釣火 太田潮
冬雨にころもち濡れ花舗に佇つ 太田白露
手稲山から春暁の鐘の音 岡山平八郎

万緑や師の肩幅の頼もしき 勝又星津女
アカシヤの花散って雨ちからもつ 勝俣比とし

この合同句集を発刊した白露札幌句会の前身は雲母札幌支社です。雲母といえば主宰が飯田蛇笏、龍太と続いて平成4年に廃刊となった俳誌。活動の場はその後、札幌白露会や北海道白露会へと移り、例会が持たれてきました。会員が高齢となり物故、退会していくなかでこの句集の発刊が決まったものです。

母のこと亡妻のことなど冬銀河 川口昭治
丹頂につのらせてるし恋ごころ 柴田和子
薫風や胸一杯の有難さ 杉山孝
河原とは風棲むところ実はまなす 三浦敏子

みを記録しておかなければ資料が散逸、功績のあった人も物故していきます。未来への道しるべ、歴史はきちんととまとめておきたいものです。企画、編集、印刷、どの段階からでもご用命を承っております。

小紙を無料で差し上げています
慌しい時の流れに、ほっと一息つける話題を提供していきたいと願っている小紙。ご希望の方には無料で定期的にお送りしております。印刷紙工までお申し込みください。